S6-1

重症頭部外傷慢性期における髄液シャントの意義

自動車事故対策機構千葉療護センター　脳神経外科
○内野　福生、岡　信男、小瀧　勝、河野　守正

【背景・目的】重症頭部外傷の数年後，脳室拡大が進行し筋緊張亢進やけいれん発作の頻度が増す例がある。重症頭部外傷慢性期における髄液シャント設置やバルブ圧調節により症状改善は期待できるか，症状の改善と脳室サイズの変化は関連するか検討した。【対象】当院でシャント設置・再建または圧可変式バルブの圧調節を行った患者19例（男性15例，女性4例）。年齢は9～64歳，外傷から「シャント設定」までの期間は1～13年（平均4.1年）。シャント設定日とは圧固定式バルブ（10例）ではシャント手術日，圧可変式（9例）では圧調節の終了した日である。【方法】「慢性期重症頭部外傷後遺症患者レベル判定表」により患者の能力をシャント設定直前，設定後1年，退院時に判定した。各時期の頭部CTでbicaudate CVIを計測し，脳室サイズとして評価した。【結果】シャント設定前・後１年の比較で外傷からシャント設定までが３年以内の群は，３年をこえる群と比較しスコア改善例が多かった。圧可変バルブ群では圧固定群よりスコアは改善し，脳室サイズも縮小した例が多かった。圧可変式例で最終的なバルブ圧は全例で3cmH2Oであった。脳室サイズ縮小は判定スコアの改善と関連しなかった。合併症は5例にみられ，シャント再建を要したものは１例あった。【まとめ】外傷から数年経過後でも筋緊張の亢進，けいれん発作の頻度増加などの症候を伴う進行性脳室拡大に注意を要する。そのような例でも積極的なシャント設置（圧調節）が有効な例が存在するのでタイミングを逃さずに対処することが重要である。